

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2018年度（前期）指定公募
「訪問看護ステーション等が開設する医療・介護の相談室づくり（3年計画）」
2年目
完了報告書

申請者：二見 典子
所属機関：一般社団法人いいケア研究所 訪問看護ステーション Benny's
提出年月日：2019年9月30日

はじめに

相談室づくり2年目の助成をいただき、1年目には月2回の開室だったものを月4回の保健室定期開室が可能となり感謝しております。私たちは、緩和ケアの経験を積んだ看護師が集まり、神奈川県平塚市で訪問看護ステーションを始めて間もなく丸4年となります。医療的ケア児や精神科訪問看護も実施するようになり、地域の様々な組織・人々との連携も広がっています。このような実践での経験をまちなか保健室で生かし、また、まちなか保健室での経験を訪問看護に生かしたいと考えております。

「グリーンケアの機能をもったまちなか保健室」の実施と結果

課題1. 保健室の定期開室とグリーン訪問とが連動した保健室利用の可能性の検討

1) 広報

- ① 保健室のチラシを2種類900部作成し、近隣地域を歩き民生委員や住民の方と直接言葉を交わしながら、チラシをポスティングした。また、近隣居宅介護事業所、地域包括支援センターへも配布した。(チラシ別添1. 2.)
- ② グリーンケアとの連動で、訪問看護で関わった方のご遺族向けのチラシも作成お手紙と共に郵送(①のチラシと併せて80件)。(チラシ別添3.)



2) 相談状況

【相談・啓発型保健室】

2018年11月から始動し2019年9月までの期間に、延べ26件の相談を受けた。毎月第1・第3木曜日の午後に開室している。実際の相談内容は、以下の通りだった。相談者の年齢は、30歳代~80歳台、相談者は、7件が男性、他は女性だった。

- ・家族のがん治療しながらの療養についての相談 3件

- ・高齢家族の介護に関する相談 6件
- ・自分自身の慢性疾患について 2件
- ・自分自身の慢性疾患末期の病状と認知症の始まった夫との暮らしのこれからのついての相談 2件
- ・がんサバイバーである自分自身の体調について 3件
- ・自分自身の孤立感について 1件
- ・家族を亡くしたご遺族の語り 8件
- ・近所の方の体調不良と介護保険に関する相談 1件
- ・地域の情報について 1件

訪問看護ステーションでの関わりのあったご遺族への保健室についての案内からご家族の来室も増えた。ご自身の経験の語りや体調、家族の体調、家族との関係の再構築などについて語られていた。話したいと思っていたが、看護師が忙しいだろうとの思いからの遠慮があり来られなかった。保健室の紹介があつてありがたかったという言葉をいただいた。

【滞在型保健室】

毎月第2・第4木曜日の午後開室している。2018年9月から2019年9月末の期間で、延べ60名が来室された。継続して来室されている方が延べ48名、新規が12名だった。来室者の90%が女性だった。来室者の特性は、

- ・がん闘病中の方がご家族とともに
- ・デイサービスが合わない高齢者のかた
- ・デイサービスが合わない認知症のかた
- ・家族を亡くしたグリーフにあるかた
- ・がんサバイバーのかた
- ・慢性疾患で呼吸法を練習したいかた

などであった。(滞在型保健室の写真別添4)

その日によって、集った方どうしのおしゃべり、簡単な手芸や手仕事を一緒にするなどを、手作りの小さなお菓子とお茶をのみながら過ごす方法をとっている。徘徊の著しい認知症の方が、この保健室では、徘徊することもなく他の方々とくつろいで過ごされており、ケアを担当される方が同行滞在、見学された。保健室では、その場に集う人同士の対等性、することを強要されない、他愛のない楽しいおしゃべり、手作りのおやつなどが、緊張や警戒心を生まない安心できる場となっているせいではないかと話し合われた。

保健室参加者は女性が圧倒的に多く、男性の相談ニーズへのアウトリーチについて課題との中間評価が、後述する、死生学カフェの企画につながった。

また、相談への来室を待つだけでなく、気軽に利用できる場であることや、情報を得ることのできる場というアピールの方法として、「死生学カフェ春夏秋冬」およ

び「まちなか保健室ミニ講座 1 回目 成年後見制度について」を企画実施した。

【保健室実績一覧】

	相談・来室数	スタッフ（延べ）	相談・面談内容概要
2018年9月	8	Vo(ボランティア)5、Ns5	
10月	5	Vo3、Ns3、補助者2	
11月	8	Vo4、Ns3、補助者2	自身の孤立・夫のがん療養
12月	9	Vo2、Ns3 補助者2	自身の急性症状
2019年1月	12	Vo2、Ns2 補助者2	自身の病気、家族の介護等
2月	11	Vo4、Ns4 補助者2	自身の病気、家族の介護、グリーフ
3月	4	Vo4、Ns2 補助者2	
4月	3	Vo3、Ns2 補助者2	
5月	5	Vo4、Ns2 補助者2	グリーフ、
6月	6	Vo4 Ns2 補助者2	がんサバイバー、グリーフ
7月	5	Vo4、Ns2 補助者2	近隣者の体調不良、グリーフ他
8月	5	Vo4、Ns2 補助者2	グリーフ、家族の介護
9月	5	Vo4、Ns2 補助者2	家族の介護、グリーフ等

3) 「訪問看護ステーション Benny's まちなか保健室 死生学カフェ春夏秋冬」の企画実施について

この企画は、チラシ(別添5)にも標記したように、「家族を介護することは、男性にとって、どのような体験なのだろうか?」「口数の少ない方は、ご自分の考えを、伝えきれずに、困っているのでは?」「独りでいろいろ考えていることについて、誰かと話してみたくはないだろうか?」という、看護師の心配性からくるおせっかいな気がかりにお付き合いいただけないだろうかという声掛けから始まった。保健室への来訪者に男性が圧倒的に少ないことに対して、思い切って、こちらから、投げかけをして応答してもらえるのかという実験的な試みでもあった。

【準備経過】

静岡大学で死生学カフェを開催している、竹之内裕文先生にご指導いただき、

- ① 死生学を保健室で開催する動機や意味
- ② 何を大切にするのか
- ③ 会の具体的な企画・運営手順

について検討した。

- ① ②については、「死生学カフェ春夏秋冬で大切にしたいこと」を明文化した。(別添6)

【具体的な企画・運営手順】(別添7)

- 名 称：「死生学カフェ春夏秋冬」とした。
- 開催日程：2,019年 夏（8月24日）秋（10月12日）冬（11月23日）
- 対 象：主に男性で家族や近い人の介護の経験がある方々、このようなテーマに関心のある方々8名程度とした。
- 企画者：ファシリテーターと保健室看護師2名とした。
- チラシ作成（前掲 別添5）：チラシは手渡しとして趣旨の説明をした。
- 準備進行・役割分担一覧表（別添5）：開催直前まで1グループで行うか2グループにするか迷い、想定していた参加人数を上回ることが予測され会場を訪問看護ステーション Benny's 事務所から公共施設会議室に変更する手続きを行った。

【第1回目開催当日】

2019年8月24日（土）13時～16時を開催時間とした。
 午前10時より、ファシリテーター（竹之内）と保健室看護師との打ち合わせを行い、最終的に、一番大事にしたいことが参加される方の関心事や語りということを確認し、1グループでの実施を決定した。

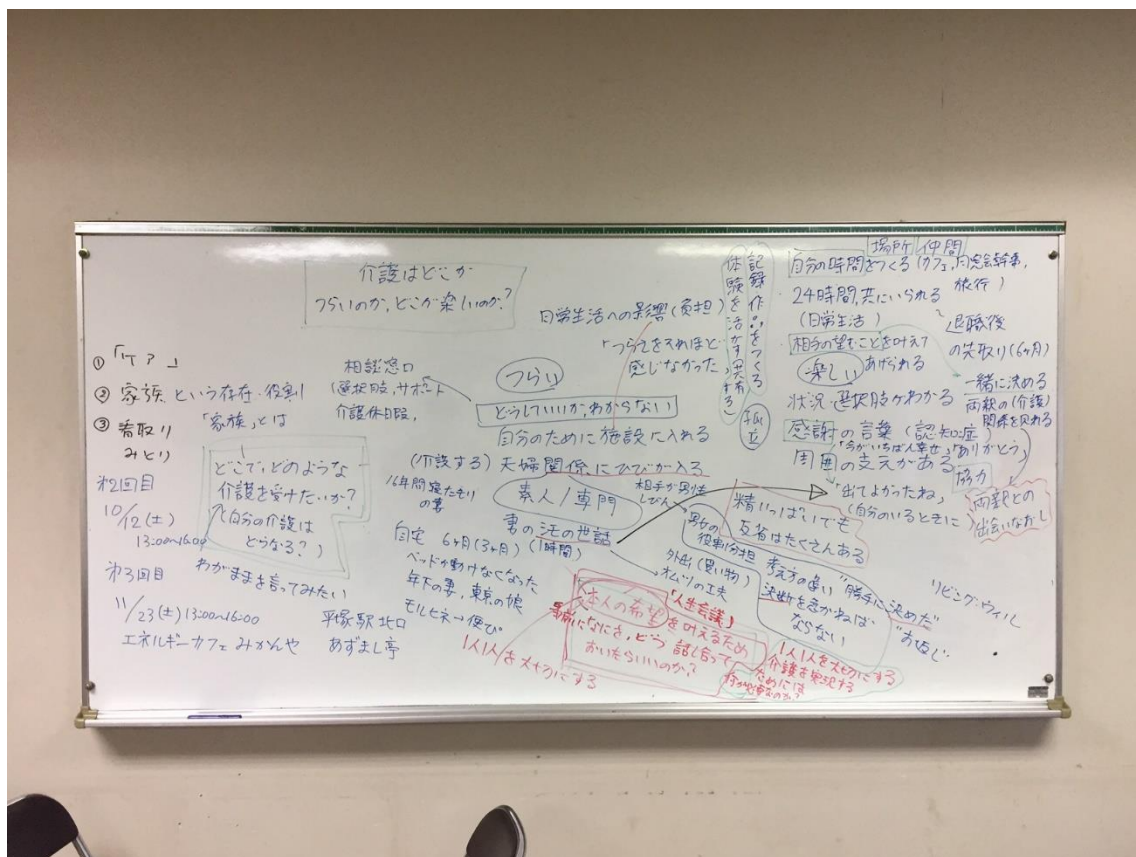
- テーマ「介護することとは」
- 参加者 男性7名 ファシリテーター1名（竹之内） 保健室看護師3名の合計11名。
- 会の様子

開会の13時には全員が集まり、ホワイトボードに向かって馬蹄形に配置した椅子に自由に腰かけてもらった。呼び名を記載した名札を付けてもらった。
 開催趣旨と「死生学カフェ春夏秋冬で大切にしたいこと」を共有し、自己紹介をしたのち、「介護することとは」のテーマの対話に入った。各々の体験談をもとに考えたことが語られ、その中から、「介護することの辛さと楽しさ」について対話をすすめた。

<画像：対話の様子>



<画像：対話の内容> (別添8)



○次回のテーマ検討

今回の対話から、「人生の終わりに自分の“希望”を叶えるために、何について、だれと、どのように対話したらよいのか?」となった。

○アンケート結果 (別添9・10)

○企画者の感想

介護を経験された方々が、介護での辛さも楽しさも両方を、自分事として語ってくださっていた様子が印象的だった。介護するという営みの辛さや大変さが、時間の経過や経験の積み重ね、相手との関係性において変化していくこと、また、介護の楽しさや良さは、共に在ること、一緒に決める、一緒に取り組むことの喜びや利他性、感謝の言葉、周囲の支えなど、生の体験と共に語られた。それぞれが、自身の体験以上に気付かされたことがあり、死生学カフェという方法の場の作り出すものではないかと感じた。

もっと、いろいろなことを対話してみたという気持ちになったこともあり、次回のテーマも決められたのは良かった。

4) まちなか保健室ミニ講座 1回目 成年後見制度について (チラシ 別添11)

開催日時 : 2019年9月11日(水) 18:30~20:00

会 場 : 訪問看護ステーション Benny' s
対 象 : 関心のある市民 10名程度
講 師 : 林 勝治先生 (平塚市 林社会福祉士事務所)

○参加者 10名

○内容 参考資料 成年後見制度をされていますか? (神奈川県)

林先生のご経験に基づく、具体的な事例を取り上げ、制度の内容、活用方法、についてお話しいただいた。法定後見制度と任意後見制度の違い、制度上の後見人の責任と義務の範囲、費用がかなりかかることもあり、当事者にとって本当に役立つ面と、不足な面もあることが分かった。

5) 課題1の考察・今後の展望

① まちなか保健室の本来の意義を考えると、近隣住民が気軽に医療・介護などの相談ができる場であるが、その、看護師との接点は、直接面談だけではないことが、今年度の活動で感じられた。電話で相談を受け、直接現場に向向いて状況を確認したケースもあった。その意味では、当ステーションのHP上への掲載を行っていなかったが、対応のルールを決めて、HP上での保健室の情報の提供も重要かもしれない。

② 情報提供の場となり、顔の見える関係づくりの一方法として、ミニ講座の開催を工夫したい。講座を介して、まずは、地域の人々と知り合う良い方法かもしれない。

関心を寄せるれるテーマの検討は必要だが、3年目計画で挑戦してみたい。テーマの選定にあたっては、死生学カフェでの対話の中にヒントがあるかもしれない。

③ 保健室への男性の来訪が少ないことから、死生学カフェ春夏秋冬の企画・実施となった。想像以上に、個々の考えを、経験談と共に語ってくださり、テーマに沿った様々な視点、考えかた、感じ方を知ることができた。また、他者の語りを伺う中から、相互に、自分自身の思いや考えが膨らむ体験もして、対話を通して他者を理解しようとする面白さが参加者の中で共有された。このような、対話の機会を、対象・テーマを変えながら、この地域で継続していくことが、当法人の理念である「ケア心のあるコミュニティの探究」ともなるように考えている。

課題2：グリーフ訪問を本事業（訪問看護）とのバランスの中で、効果的に実施できる方法を、実施しつつ検討する。

1) 結果：グリーフ訪問は、2018年9月から2019年9月末までの期間で、15件のみの実施だった。この間の、対象者数は25名だったので、60%の訪問率だった。

一方、ご遺族が、事務所を訪れてくださるケースが増えた。

2) グリーフ訪問を受けにくいご遺族へのはたらきかけ

企画と結果：2015年11月～2018年12月末までにご自宅で看取りをされたご遺族46家族に遺族の集いの声掛けを行った。返信ハガキを同封した手紙を送付し、19名から返信を受け取り、3家族が当日参加された。

2019年5月19日（日）13:00～15:00 （チラシ 別添12）

準備スケジュール～当日の計画（別添13）

振り返り記録（別添14）

3) 課題2の考察と今後の展望

グリーフ訪問は、訪問看護業務の繁忙とのバランスで、時間の確保が困難なことも多かった。死別時のグリーフに関する一定のアセスメントを行い、反応が身体化されるリスクや複雑性悲嘆のリスクの高いケースへのフォローの判断をすることが重要だと考えられた。死別時に、悲嘆反応そのものについて、話したいときに応じることのできるまちなか保健室やその他の社会資源についてなど、メリハリのある情報提供が重要である。保健室でグリーフの語りをされる方も多く、そのような場があることの周知が重要であると考え、引きつづき、実施していきたい。また、当ステーションが関わったケースだけでなく、広く、利用してもらえる工法の工夫が必要だと感じている。

課題3：保健室に関与するスタッフの学習機会をつくり、提供するケアの質の担保に役立てる。

1) 関連する事業を運営する他組織のデータ収集・見学・交流

2019年4月27日（土） マギーズ東京見学 看護師4名

●感想 マギーズ東京の環境、運営コンセプトが興味深い。ケアを提供するのではなく、来訪者とともにある、共に考えるが徹底されていることが素晴らしい。

来訪者・そこに参与するものにとって非常に創造的な場である。

2) 市内総合病院看護師との事例検討会の開催

2019年2月13日（水）18:30～20:00 （別添チラシ15）

テーマ：「療養場所の意思決定支援における看護の機能～脳腫瘍術後の化学療法継続・療養場所の選択の支援にかかわって」

参加者：病院看護師4名、訪問看護師7名

2019年5月15日（水）18:30～20:00 （別添チラシ16）

テーマ：「がんの治療期から看取りまでを在宅で過ごす方のケア 前編」

参加者：病院看護師3名、訪問診療医、訪問診療スタッフ1名、訪問看護師7名

2019年8月22日（水）18:30～20:00 （別添チラシ17）

テーマ：「がんの治療期から看取りまでを在宅で過ごす方のケア 後編」

参加者：病院看護師 3 名、訪問診療医 2 名、訪問診療スタッフ 1 名、訪問看護師 7 名

●感想 がん化学療法が外来中心で実施される昨今、その経過の中で、患者家族は、副作用・症状への緩和ケアの必要、また、日常生活やこれからのことなど様々な葛藤を抱えながら、毎日を過ごしている。壮年期のこうした方々への訪問看護の導入は、まだまだ数が少ないが、病院看護師と訪問看護師が連携するとき、それぞれの強みを生かして、患者家族への緩和ケアはもとより、意思決定のサポートも可能となる。また、在宅療養継続の可能性や、そのための、訪問診療医への連携も、患者家族のニーズに沿った形で提案・提供できる。このような、実感を、病院看護師、訪問看護師の双方が共有する意義は大きい。

3) 保健室スタッフのための勉強会の開催 (チラシ 別添 18)

2019年6月1日(土) 13:00~16:00 (講義資料 別添 19)

テーマ:「発達障害・パーソナリティ障害のあるかたの理解とかかわりのために①」

講師: 斉藤由美先生

参加者: 看護師 9 名 (他事業所看護師 2 名)、ケアマネージャー 1 名 (他事業所)

2019年8月3日(土) 13:00~16:00 (講義資料 別添 20)

テーマ:「発達障害・パーソナリティ障害のあるかたの理解とかかわりのために②」

講師: 斉藤由美先生

参加者: 看護師 8 名 (他事業所看護師 3 名)、医師 1 名

●感想 訪問看護や保健室でのケアや相談場面も含め、対象となる方々との関わりに難しさを感じる場面は少なくない。それが、危機的な状況にあるためのストレス反応なのか、器質的な変化からの反応なのか、パーソナリティの問題なのかなど、見極めは簡単ではない。今回、このテーマでの勉強をしたことで、決めつけるのではなく、可能性を頭に入れながら関わりかたの工夫ができることが参考になった。発達障害のある方々の場合に、環境調整や具体的な伝え方が非常に重要であることも勉強になった。

4) 課題 3 の考察と今後の展望

① マギーズ東京の見学は、半数のスタッフが行ったが、まだ行けていないものは、3年目で見学を行ってもらいたい。特に、来訪者にケアをするというよりは、必要に応じて共に考える、創造するありかたを体感してほしいと考えている。

② 連携病院との小規模事例検討会は、今後も、個別の事例への倫理的配慮を行たううえで、継続実施していきたい。地域連携担当の看護師の参加が多く、病棟看護師の方が参加できない現状があるが、開催方法の工夫が必要なのかもしれない。また、

訪問診療医も参加され、より、議論が深まったこともあり、関係されたケアマネージャーや介護職も一緒にふりかえりができることを目指そうと参加者間でも話し合われている。

③ 保健室スタッフのための勉強会は、スタッフの参加意欲も高く、また、関心のある方には、組織の枠を超えて声をかけていきたい。テーマは、保健室の運営に必要で役に立つ内容を、領域は限定せずに柔軟に検討していきたい。

おわりに

「訪問看護ステーション等が開設する医療・介護の相談室づくり（3年計画）」の2年目を終え、保健室への相談者に、近隣の方々の飛び込み相談の割合が増えてきていることを嬉しく感じています。まだまだ、相談件数が多いとは言えません。ミニ講座・死生学カフェの取り組みと、チラシやHPも活用した広報をしていきます。

このような取り組みも、助成による経済支えあるからこそできるチャレンジだと思いますが、一方で、助成が無くても、この働きが必要とされ維持できる方法もこれからの活動の中で見出すべき重要な課題だと考えています。

最後に、本報告書の内容は、すべて、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成によるものであることを感謝と共に明記いたします。